

第3回 作品展と工作体験「みて、つくって、楽しんで —被災地の子ども達を応援しよう—」開催報告

河野光子・堀尾昇平・稲貝祥子・高杉志緒

Report on the Third Product Exhibit and Workshop
“Seeing, Creating and Enjoying—Supporting Children
of Disaster Stricken Areas—”

by

Mitsuko Kohno, Shyohei Horio, Shyoko Inakazu, and Shio Takasugi

要旨

手作り制作・遊び（レクリエーション）の良さを鑑み、本学園では社会的活動の一環として平成21年から毎年7月、合計2回の「作品展と工作体験」を行ってきた。

第3回にあたる平成23年度は、東日本大震災発生後の開催を踏まえて「来場者（地域在住者）と共に壁面構成を制作し、被災地の保育施設に送付することによって被災地支援の一助を行う」目的を付加して開催。会期終了後7月28日、会場制作物と学生の制作物を合わせて宮古市内の保育所に発送。8月31日付で宮古市内保育所（3施設）より御礼状の送付を頂いたことにより、当初の目的は概ね達成できたと考えられる。同時に、今回の交流を通じて、被災地に対しては長期的な支援が必要であることを実感することができた。

キーワード：手作り制作、おもちゃ、遊び（レクリエーション）、東日本大震災、被災地支援、宮古市、社会活動、ワークショップ

1. 経過報告 —第1回・第2回「作品展と工作体験」について—

手作り制作（おもちゃや手工芸品）・遊び（レクリエーション）は、子どもから高齢者まで年齢を問わず自己表現を促し、五感を刺激する。成長発達・健康増進・社会性の促進をはじめ生活に潤いを与える等の重要な役割を担っている。また、手作り制作はモノに対する愛着心も

育む。

これら「手作り制作・遊び」の良さを鑑み、本学園では社会的活動の一環として平成21年7月17日（金）～20日（日）の4日間、シーモール下関専門店街（2階ピアモール）にて、第一回「楽しい手作り遊び」作品展（手工芸品等の展示と手作りおもちゃで遊ぶ場の提供・ワークショップ）を開催し、本学紀要で開催報告を行った¹⁾。

第1回の開催が好評であったため（アンケート任意回答76枚、四段階評価：とても良かった77.6%、良かった18.4%、あまりよくなかった・よくなかった0%）、開催者側が総括した反省点（手作りおもちゃを制作した学生達が来場者の対応を行う、ワークショップの作業場と展示配置の再考）を踏まえ、平成22年5月、同会場で第2回作品展と工作体験を開催（平成22年7月17日（土）～21日（水）の計5日間）。「楽しい手作り遊び」という題名では、作品展示とワークショップ、双方の実施が分かりにくいと考え、「みて、つくって、楽しんで―作品展と工作体験―」と題して「幼児向けおもちゃ」「壁面構成」「高齢者のための手工芸」等の作品展示とワークショップを同施設内において開催した。第1回と同内容のアンケートを行ったところ、前回と同様、好評を得ることができた（任意回答63枚、四段階評価「とても良かった75%、良かった23%、あまりよくなかった・よくなかった0%、無回答2%」）。最終日会場撤収後、担当教員で反省会を行ったところ、下記の4つの観点から意見が挙がった。

①担当者について

- ・毎日教員が1～2名、土曜（17日）・日曜（18日）・祝日（19日）は学生2～4名担当して、展示作品説明・ワークショップ等を行ったが人数が足りなかった〔17日60名、18日35名、19日70名、20日0名、21日34名〕。特にワークショップ・乳幼児のおもちゃ展示説明・援助はより多くの学生の補助が必要である。

②壁面構成について

- ・「夏」の風景だけでなく、四季を主題にした作品も発表して良いと思う。
- ・工夫点や制作の過程なども発表してはどうか？
- ・来場者（子ども）と共に一つの壁面を作るワークショップを試みてはどうか？

③発表内容について

- ・全て子ども向けにするのではなく、ポスター展示発表など、保育学科学生として、日常のゼミナールや授業の研究発表の場にしてはどうか？

④開催期間等について

- ・5日間は長い。平日（20日）は来場者も少なく、ワークショップ参加者もいなかったため、次年度は4日間で行った方が良い。
- ・準備に取り掛かるのが遅かった。早目に日程を決定し、用意をはじめる必要がある。

以上の反省点を踏まえ、第3回作品展と工作体験開催に対して、平成22年度中に準備したことは以下の3点である。1) 上記③について、保育学科で検討の結果、第3回以降は授業担当教員の任意参加とし、学科長に申し出ること。2) 開催時期は7月中の週末に4日間開催することを大学側に提示。3) 下関シーモール専門店街（過去2回の会場）への会場提供依頼。

2. 第3回 作品展と工作体験 開催報告

2・1 開催目的・後援について

平成23年3月11日、東日本大震災の発生により、同年4月中旬「本行事を予定通り行うか否か」担当教員で検討を行った。その結果、従来の主目的である「手作り制作・遊び（レクリエーション）の良さを地域に伝える」だけではなく「被災地援助も同時に行う」という意見で一致した。

具体的な方策として、第2回の反省会で挙げた「来場者と共に一つの壁面を作るワークショップを試みる」という意見を基に「来場者（地域住民）と共に壁面構成を制作し、被災地の保育施設に送付することによって被災地支援の一助を行う」という目的を付加することとした。

なお、募金活動については、既に学内でも行われており、会場となる下関シーモール専門店街内にも既に募金箱が設置されているため控えることとした。

後援については、前2回とも「下関市教育委員会」にお引き受け頂いた経緯を踏まえ、今回の被災地への作品送付を含む開催企画について、5月大型連休明けに下関市側に相談を行った。その結果、今回の趣旨を御了解頂き「下関市市民部防災安全課」と連絡等を行うことになり、5月13日付で下関市に計画書（案）を提出。5月17日付で正式な計画書を下関市に提出後、第3回も「下関市教育委員会」に御後援を頂くこととなった。同時に市民部防災安全課より「岩手県宮古市生活課」と連絡を取って頂き5月24日、宮古市内保育施設への作品送付の内定報告を受けた。

ここで、本学から宮古市内施設への作品送付についての背景について「下関市と宮古市との関係」という観点から付記しておく。

下関市は、平成16年（2004）1月15日、本州の東西南北4端に位置する都市の一員として、岩手県宮古市・和歌山県串本町・青森県大間町と共に「第1回本州四端協議会」に参加。爾来、観光振興・地域活性化等を目的に交流を行い、平成21年（2009）1月23日には、本州の東西南北4端に位置する都市の一員として、上記3都市と共に「大規模災害時における相互援助に関する協定」を締結している。

下関市は、東日本大震災発生後の3月14日、東北地方に消防局職員の派遣（6隊22名）をはじめとした人材派遣を実施。早期の人材派遣に加え、上記協定に基づき第1回「東北地方太



写真1 第3回「作品展と工作体験」会場風景（シーモール下関2階サンパティオ）

平洋沖地震」支援対策会議（平成23年3月16日）において、「物資支援計画」では「本州四端相互援助協定に基づく宮古市への救援物資搬送について」を決定し、支援を行っている²⁾。

他方、もう一つの後援団体であり、会場として内定を頂いていたシーモール下関専門店街に対して5月17日付計画書を提出したところ、前2回の会場となった「2階ピアモール」（商店が両脇に並ぶ縦長の廊下）ではなく、より広いスペースである「2階サンパティオ」（約13×11.5mの商店に囲まれた共同空間）を御提供頂くことになった（写真1参照）。このように、前2回の開催とは目的・会場が異なることを踏まえて以下、第3回の概要について開催報告を行う。

2・2 第3回 作品展と工作体験 開催日程等

1. 開催期間：平成23年7月16日(土)～7月19日(火) 10時～19時、最終日は17時迄
2. 会場：シーモール下関専門店街 2階サンパティオ（下関市竹崎町4-4-8）
3. 後援：下関市教育委員会、シーモール下関専門店街
4. 開催案内状発送先：下関市内幼稚園（13園）・下関市内保育所施設（5園）、
下関市内小学校（8校）、高齢者福祉施設（3施設）、報道機関（新聞社等6社）
5. 主要広報物

- ・開催案内事前報道 (①～③)、開催報道 (④～⑦)、全て2011年に掲載・放送
 - ①市民の広場7月、『市報しものせき』7月号、下関市広報公聴課、7月1日
 - ②おでかけ情報、下関生活情報紙リフレッシュ、週刊リフレッシュ、7月8日
 - ③被災地に作品贈ろう 下関短大16～19日工作体験、山口新聞、7月8日朝刊
 - ④被災地へ壁飾り作って送ろう 下関短大、シーモールで催し、山口新聞、7月18日朝刊
 - ⑤(下関版)下関短大生ら工作体験、作品展 被災地応援作品も、読売新聞、7月18日朝刊
 - ⑥(下関版)被災地励ます心 折り紙に込める 下関短大生ら制作、朝日新聞、7月18日朝刊
 - ⑦Yab ニュース、山口朝日放送株式会社、7月18日17時半～18時の放映時間中に数分間

2・3 展示報告

以下、展示コーナー・ワークショップ毎に展示・開催報告を行う。第1回・2回は、下関短期大学附属第一幼稚園の園児による工作作品の展示を行ったが、第3回は他行事との兼ね合いもあり不参加となった。

2・3・1 壁面構成展示「四季の風景」(担当：堀尾昇平)

第1回・2回と同様、保育学科学生による壁面構成作品の展示を行った。幅広い造形表現を習得し、季節感あふれる保育現場を演出できる保育者となることを目的に、「保育内容造形表現Ⅱ」(保育学科2年)において、壁面構成の実践指導を行った。前2回は、「夏」の作品のみであったが、今回は「四季」という課題を出し、春・夏・秋・冬、4つの作業班(1班各4～8名)に分けて作業を行ってもらい、表現場面の設定や材料の指定は全て学生主体で行った。各々の班が色模造紙に切り紙・折り紙・セロファン・綿等の素材を工夫しながら制作した。5作品の主題は以下の通りである。春の風景(花に囲まれたブランコに乗った動物達)、夏の風景(スイカ割り)、秋の風景(お月見、芋ほり)、冬の風景(クリスマスツリーと子ども達)。



写真2 (左) 下関短期大学附属高校ジュニアカレッジ生徒作品「夏の風景」展示状況(3作品)
(右) 保育学科2年生作品「秋・冬の風景」展示状況(3作品)

また、第2回から、下関短期大学付属高校ジュニアカレッジ生徒の壁面構成作品も展示しており、今回も「夏の風景」(3枚)を展示した。これは、前期に2回、担当教員が行っているジュニアカレッジコース選択生徒(16名)による作品である。

以上8作品を、4面のパネルの両面を使って展示した(写真2参照)。来場者には、保育者だけでなく介護施設勤務者もおられ「季節演出の参考になったので写真撮影したい」という希望があった。

2・3・2 「0・1・2歳児の発達を促す手作りおもちゃ」(稲員祥子担当)

第1回・2回と同様、前年度の夏季休暇期間における保育学科1年生への課題「0・1・2歳児の発達を促す手作りおもちゃ」(約35点)の展示と、おもちゃ5種類の制作方法解説プリントの希望者配布を行った。なお、解説プリントの内訳は以下の通りである。「つなげて遊ぼ」(ボタンで留め外しができる布製電車)、「かにさんとあそぼ」(足を引っ張ることができる布製のカニのぬいぐるみ)、「音鳴るクッション」(中に鈴を入れたフェルト製動物ぬいぐるみ)、「おさんぼ布えほん」(動物が入る布絵本)、「ケロピョンとスニーカー」(フェルト製で紐結びの練習ができる靴型ぬいぐるみと口の部分がチャックのカエル型ぬいぐるみ)、以上5種である。

前2回の会場は、広さの関係で、十分に遊ぶ場所を作ることができなかったが、今回は床上に敷物を敷き、靴を脱いで上がっておもちゃで遊んでもらうコーナーを作った(写真3参照)。

また、「乳幼児のおもちゃ展示説明・援助はより多くの学生の補助が必要」という前回展示の反省に立ち、展示日には、おもちゃを作った保育学科学生(2年生)を随時3名以上ずつと担当教員が対応できる体制を整えて年少の来場者におもちゃで遊んでもらうコーナーの援助を行った。

前2回の会場では、小学生が手作りおもちゃで遊ぶ割合が高かったが、今回は保護者と共に



写真3 「0・1・2歳児の発達を促す手作りおもちゃ」展示状況
(左) 手作りおもちゃで遊ぶ子どもと学生 (右) 手作りおもちゃをみつめる親子と担当教員

来場した乳幼児を中心に、手作りおもちゃで遊ぶ姿がみられた。同時に、対応に応じた学生は年齢に応じた遊び方の違いや（例：布製絵本の鑑賞は、3歳未満児はページをめくることが中心、3歳児以上になると、取り出せる動物や人形を出して手にとって見立て遊びを楽しむ）、保護者と子どもとのやりとりを観察することによって、発達の状況や保護者との対応を学ぶことができた。

2・3・3 高齢者のための「型染め・工作物」展示（河野光子担当）

高齢者のQOL（クオリティ・オブ・ライフ、人生の質）を高め、健康増進を行うため、生きがい対策として社会との交流を図る高齢者のレクリエーション（遊び）の理解と支援は重要という視点に立ち、第1回より高齢者向け型染め及び工作を展示している。

本学では、平成16年度から20年度まで訪問介護員2級資格取得希望者がボランティア体験を行っていたが、平成21年度から養成講座を廃止したため、21年度には行わなかった。

しかし、平成22年度から年に約4回、栄養健康学科「ふれあいゼミナール」（古屋トシエ・河野光子担当）の受講生が老人福祉施設において「ボランティア活動」を行っている。活動内容は、レクリエーション（学生による紙芝居披露、童謡の歌唱等）や工作体験である。学生は、高齢者の工作制作補助を行うと同時に高齢者と触れ合い、コミュニケーションを図っている。主要な活動実施施設は、安岡病院リハビリ室・特別養護老人ホームアイユウの苑・老人保健施設アイユウ・老人保健施設サンビュー下関・吉水デイサービスの5ヶ所である。施設で利用者を対象に工作を行う場合、季節に応じた主題・制作物を事前に設定し、大学側が工作の材料を持参して、今回展示した型染め（高齢者が染めやすいよう図案を型抜きした厚紙を用意し、テーブルセンター等の布を顔料で染めて頂く作品）・工作物等を中心に制作を行っている。

このような経過を踏まえ、第3回の展示作品は、今回はじめて披露する新規の制作品と、既に担当教員・ボランティア学生が老人福祉施設現場で制作を行った作品に大別できる。また、前2回と同様、四季（春夏秋冬）4つのコーナーに分けて、作品を展示した（別表および写真4（左）参照）。

表1. 「リサイクル工作」主要展示作品一覧（新規作品には*を付した）

季節	作品名（主要材料等）
春	男女の人形（紙またはプラスチック製コップ・折り紙）、 *季節の置物（空き缶を台として上に動物・花等の折紙貼付）
夏	*壁掛け（豆腐容器の連結・動物・花の図柄を貼付）、*ペンギンの置物 （ヨーグルト容器・色画用紙貼付）、提燈（食品トレー・厚紙・折紙）
秋	*壁掛け（豆腐容器で六角形を形成、絵柄貼付）*置物（卵20個入りパックが台・ 人・動植物の切紙を貼付）、*帽子（透明ゼリー容器が頭部、厚紙・切絵を貼付）
冬	クリスマス用鈴（黒プラスチック茶碗蒸し容器又はヨーグルト容器に鈴・切絵貼付）、 クリスマス壁掛け（アイスクリーム蓋連結・切絵）、リース（折紙組合せ・切絵貼付）

展示期間中、型染めの手法、リサイクル工作等のアイデア等について参観者に説明した。
福祉関係の従事者、手工芸に興味・関心がある来場者の中には、「手元にある材料を活用して

表2. 「リサイクル工作」素材別作品一覧（新規作品には*を付した）

素 材	作品名（制作方法の概要等）
半透明・透明豆腐容器 (底面約10cm 角正方形)	壁掛け（5～7個連結し、内側に切絵を貼付、最下部に鈴・色紙短冊を飾り付け）、*置物（六角形の台紙周辺に透明容器を固定し、その中央部に絵・折り紙を貼付）
アイスクリーム蓋（丸型）	壁掛け（6個連結、各蓋中央に絵を貼付）
ヨーグルト容器(円形小型)	男女人形（顔：手袋の指に綿を入れ顔とし毛糸で髪を貼付、着物：折り紙）
ヨーグルト容器(円形中型)	*ペンギン置物、*彗星・織姫（色画用紙貼付）
ヨーグルト容器（立方体）	クリスマス用鈴（四面に緑の色紙を貼付、その上に切り絵貼付、中に鈴、上部に紐付）
発砲スチロール製食品 トレー (円・楕円・長方形等)	額（内側に切り絵貼付）、提燈（長方形トレー4枚又は6枚で立方体を作り上部に釣り糸、下部に飾紐をつけ、側面に折り紙を貼付）、水族館（長方形トレーを天井に見立て、切絵で制作した魚・海草等を釣り糸で下げる）
透明ゼリー容器（半円形）	水中花（発砲スチロールの土台に造花・折り紙等を飾り、蓋をして吊り下げる）、*帽子の壁飾り（厚紙で帽子のツバを作成・切絵貼付、容器を貼付、周囲をリボンで結ぶ）
ペットボトル蓋	壁掛け（色画用紙の台紙に切絵（七福神・七人の小人・かたつむり）を付けた蓋を貼付）、壁面構成（パネルシートを壁面とし、蓋で図案を作成。他にビーズ・造花等を使用。写真4(右)参照）
黒色プラスチック製 茶碗蒸し容器	クリスマスの鈴（切絵貼付、内側に鈴を付ける、上部に紐）
コップ(紙製・プラスチック製)	お雛様（底を台にして頭部に切絵貼付、側面は折紙で着物貼付）
プラスチック製円形カッ プ容器	置物（台紙に魚等の切絵貼付、容器の継ぎ目を接着剤貼付、上部に鳥等の折紙を飾る）
団扇	団扇（全面に用紙貼付、朝顔・金魚等の折紙を貼付、背景の模様色塗り）

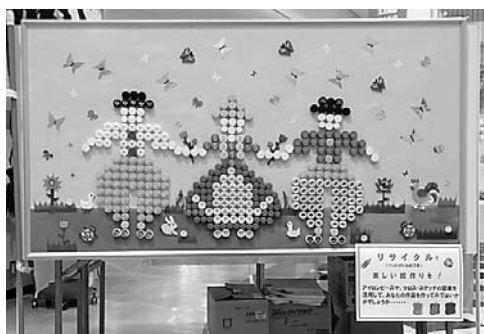


写真4 (左) 説明書「高齢者のレクリエーションの重要性」、「型染め作品」(秋・冬)等展示状況
(右) リサイクル作品（壁面構成）「春の少女と少年」（ペットボトル蓋を活用）

早速、制作してみたい」という意欲的な感想も寄せられた（アンケート参照）。本展示がきっかけとなり、各々の創意工夫による制作を通じて「生活の活性化」が推進できるものと期待している。

なお、前回と同様、本コーナーで最も注目を集めた壁面構成「春の少女と少年たち」は、パネルシートを壁面にして、手芸のクロス・ステッチ図案を参考に、ペットボトル蓋・ビーズ等を利用したリサイクル作品である（写真4（右）参照）。この壁面構成作品は展示期間終了後、老人福祉施設に寄贈した。壁面構成を含めたりサイクル作品に対して通りがかりに見つめる方、もの珍しそうな眼差しで御覧になる方等、個々の作品に対し工夫等を鑑賞しておられた。また、絵画制作に興味を持つ方が型染めの図案・制作に関心を持ち、今後取り組みたい意向を示された（2・6参照）。

2・3・4 ポスター展示「食育双六」（高杉志緒担当）

平成23年度前期授業、1年生「児童文化」・2年生「総合演習」合同授業において、「食育表現ゼミナール」選択者（保育学科学生1年生4名、2年生6名）が3班に分かれて制作した3種の絵双六の拡大コピー（「園児になって双六」「恋物語・ダイエット双六」「食育 for スゴロキアン」3枚）と双六の説明（1枚）を色模造紙に貼り付けて展示した（写真5参照）。

この絵双六制作は、学生側から「双六を制作したい」と希望を述べたことに端を発している。担当教員は学生側の意見を尊重し、『下関ぶちうま食育プラン』³⁾ 巻末に「しものせきしょくいくすごろく」が添付されていることを紹介。「食育」について学んだ後に、各班が工夫をこらし、新規の「食育双六」を制作したことをポスター展示によって紹介した⁴⁾。なお、18日のワークショップにおいて、展示した3種の「食育双六」が行えるよう用意したが、双六を制作した学生が被災地への作品制作援助を行ったこともあり、十分な対応ができなかったことが反省点として挙げられる（2・5参照）。

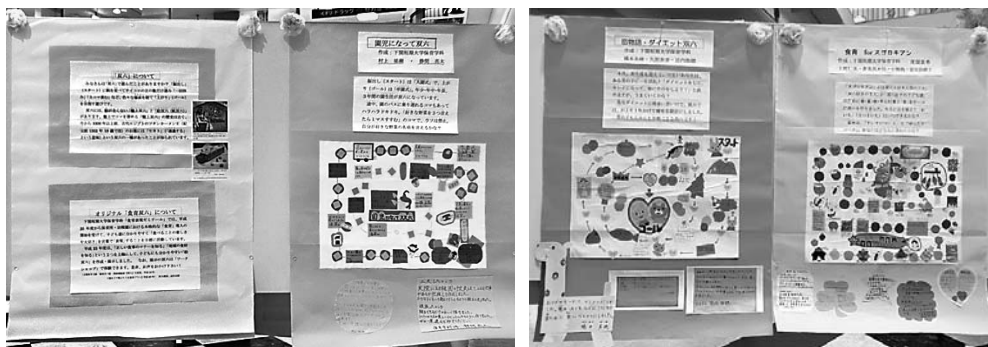


写真5 ポスター展示「食育双六」（説明書1枚、双六3種）展示状況

2・3・5 ポスター展示「乳児・小児の移動と安全について」
(非常勤講師小西孝子授業担当、河野光子展示担当)



写真6 ポスター展示「乳児・小児の移動と安全について」展示状況

保育学科2年生は、健康な小児の成長発達を学び実践力を高めることを目標とした「小児保健実習」(非常勤講師小西孝子担当)を受講し、前期授業において授業課題として「壁新聞」を作成している。乳児・小児に関する新聞記事・広告記事・インターネット等から、各学生の興味・関心に応じた「壁新聞」を作成する。即ち「日常生活の中から資料を探す」「比較・分析を行う」「考察する」という作業を通じて、同じ資料(データ)でも各自の思いや分析が異なることを学習している。

学生が作成した「壁新聞」展示については、第2回「作品展と工作体験」以降、授業の成果を発表する場として一部学生の作品を展示している。今回は、23年3月卒業学生8名、23年度在学学生8名の分を合わせて「乳幼児の移動手段について」「子どもの安全・安心と環境」という身近な2項目に分けて展示した(写真6参照)。

2・4 ワークショップ開催報告

ワークショップは、各日14時～16時、約2時間ずつの予定で開催した。以下に内容及び参加者数等の概要を報告する。

(1) 7月16日：紙工作で遊ぼう (堀尾昇平担当、子ども30名参加)

幼児は「遊び」において、動くもの・飛ぶもの等を好むため、担当教員は、第1回作品展から身近な素材・道具を使って楽しめる工作をワークショップで作成・指導している。

今回も幼児・児童を対象に、紙を素材とした「ぱたぱたことり」(小鳥の翼を左右の手で持



写真7 ワークショップ開催状況：(左)7月16日(堀尾昇平担当)、(右)7月18日(河野光子担当)

ち、近づけたり離したりすると嘴や翼が動く紙工作)と「ヘリコプター」(細長い紙片に切り込みを入れて羽を作り、飛ばして遊ぶ工作)の2作品をワークショップで取り上げた。作る楽しさと、動かして遊ぶ楽しさ、双方を味わって頂くためである。用意した紙が硬く、子どもにとって折るのが大変であったことが反省点として挙げられる。土曜日ということもあり、16時頃から参加者が増加したため17時半まで行った。参加者は、短時間で双方を作り、自分で作った工作は持ち帰って頂いた。

(2) 7月17日・18日：壁掛け工作 (河野光子担当、17日30名・18日33名参加)

「高齢者のための『型染め・工作物』」コーナーで展示したりサイクル壁掛け工作を来場者と共に制作した(17日：豆腐容器の連結・犬と花の図柄貼付、18日：食品トレー内に「夕涼み」「少女」の絵柄貼付)。材料(食品トレー・貼付用の絵柄が印刷された用紙)等の準備は担当教員が行った。参加者の大部分は幼児・児童であり、各々の好みに応じた絵柄を選び、貼り付け作業を行って作品を完成させた。付き添いの保護者は、子どもの制作を見守りながら、出来上がった作品を喜んで持ち帰った。参加者には、デイサービス利用者・孫のために制作を行った高齢者等も含まれていた。

2・5 被災地支援作品(壁面構成)制作報告

被災地支援作品(壁面構成)制作のため、2ヶ所のパネル壁面に模造紙を貼って用意した。当初は、来場者(制作希望者)に適宜、切り紙・シール等を貼り付けて頂き、会期終了後、学生等でアレンジを加える予定であった。つまり〈学生・教員は積極的な援助を行わず、来場者を主体的として壁面構成を行って頂く〉のが当初計画であった。当初計画の状態ですら16日、制作経過をみたところ、来場者が積極的に制作しにくい状況であることが判明した。そこで、17・18日は、上記ワークショップと同じテーブルで、学生が来場者(主として子ども達)に声を掛けながら「切り紙」「折り紙」を援助しながら制作することとした。来場者が、学生と一緒に



写真8 (左) 7月17日 被災地支援作品を制作する子ども・保護者と学生 (向かって左端)
(右) 会場で来場者・学生が制作した被災地支援壁面構成作品 (3枚)

に同じ壁面に向かって作品制作を行うことにより、工作を楽しみながら被災地支援作品の趣旨説明を受けることができるようになった。

但し、当初用意した18日ワークショップ「食育双六遊び」(展示した3種の双六を来場者と実践)は、双六制作学生が被災地支援作品制作援助を行ったため実行できなかったことが反省点として挙げられる。しかし、学生の援助により期間中、3点の壁面構成作品が制作できた(写真7(右)参照)。

2・6 アンケート集計報告 (高杉志緒担当)

展示期間中アンケートを実施した(任意希望者のみ、回収数67枚)。主な設問・集計結果は以下の通りである(%は小数点以下四捨五入)。下記①～⑤の回答比率を第1回アンケート集計(回収数76枚)と比べると比率に大差はなかったが、15%以上異なったのは、④回答者認知経路(「シーモールに来館して」第1回59%→今回89%)、⑤感想〈満足度〉(「とても良かった」第1回78%→今回60%、「良かった」第1回18%→今回39%)という2項目である。認知経路については、以前より広く、人通りが多い場所での開催となったことが理由として挙げられよう。満足度については、対応した学生の態度・援助の違いによる可能性がある。

なお、第1回アンケート集計における⑥「感想(自由記述欄)」は、回答者の年代別に分類したが、1. 10代以下の回答は、全て保護者が行っている。2. 日によって回答者数が異なる。3. 担当学生の対応によって回答内容(満足度)が異なる。以上3点を考慮し、日別に統計を行った。

①回答年齢(無回答1人 1%)

・9歳以下	17人	26%	・10～19歳	6人	9%
(19歳以下人数:未就学児5、小学生13、中学生0、高校生3、大学・専門学校2)					
・20～29歳	12人	18%	・30～39歳	16人	25%

- ・40～49歳 7人 10%
 - ・50～59歳 5人 7%
 - ・60～69歳 1人 1%
 - ・70歳以上 2人 3%
- ②回答者性別 : 男性 14名 21% 女性 53名 79%
- ③回答者居住地
- ・下関市内 49人 72%
 - ・下関市外(山口県内) 9人 13%
 - ・北九州市内 4人 6%
 - ・福岡県 2人 3%
 - ・その他地域 4人 6%
- ④回答者認知経路
- ・シーモールに来館して(通りかかった) 59人 89%
 - ・知人・友人の紹介 4人 6%
 - ・学校の紹介 1人 1%
 - ・その他 3人 4%
- ⑤感想〈満足度〉
- ・とても良かった 40人 60%
 - ・良かった 26人 39%
 - ・あまり良くなかった 1人 1%
 - ・良くなかった 0人 0%
- ⑥感想(自由記述欄)

みてみたい工作・つくってみたいもの

(初日) 16日(土)(全回答者1名の内1名) : 手作り玩具

(2日目) 17日(日)(全回答者21名の内11名)

- ・アンパンマンの釣り(2名)・布の玩具(2名)・難度の高い折り紙工作・おもちゃ
- ・乳幼児の発達をうながす手作りおもちゃ・壁にかけられる布の玩具・双六・パズル・編み物

(3日目) 18日(月・祝)(全回答者38名の内20名)

- ・アンパンマンの釣り(3名)・カニさんと遊ぼう(2名)・木工作品(2名)
- ・粘土遊び(2名、内1名「消しゴムになる物」)・ブロック(2名)・はらぺこあおむし
- ・フェルトを使った作品・毛糸のボール・双六・ロボット・壁面構成(季節の工作)
- ・乗り物系の玩具・カブトムシ・ステンドグラス・幼児でもできる簡単なもの
- ・リサイクル作品(ペットボトルかキャップで作る動く玩具)

(4日目) 19日(火)(全回答者8名の内4名)

- ・おもちゃ・音遊びに使う物・型染め・布絵本

意見・感想等

(初日) 16日(土)(全回答者1名の内1名)

- ・学生が積極的に頑張っていると感じた。
- ・資料など見るだけでは分からないこともあるので、実習やボランティアなどに参加して色々なことを学んで欲しい。

(2日目) 17日(日) (全回答者21名の内11名)

(手作りおもちゃに対して)

- ・ 沢山の手作りおもちゃがあり、とても上手に出来ていた(3名)
- ・ 子どもがとても喜んでいて、楽しく遊んでいた(3名)
- ・ (子どもが) 予想以上に熱心に遊んでいた
- ・ 特に電車などつなげて遊ぶ玩具に(子どもが) 興味・関心を持った
- ・ 丁寧にフェルトで玩具が作ってあり感心した
- ・ アンパンマンの玩具が良かった ・ 自分も子どもに作ってあげたいと思った
- ・ 2歳の娘は、そろそろボタンの練習をするので、ボタンの玩具は参考になった

(学生に対して)

- ・ (これから) 頑張ってください(3名)
- ・ 学生時代に作ったものが職場(保育園)で活かされる。就職したら時間がない。学生時代に沢山作って、子どもと関わっておくと良い
- ・ 若い人たちが小さい子どもと触れ合うことはとても良いことだと思う
- ・ お兄さん、お姉さん達に遊んでもらって、(子どもが) とても嬉しそうだった

(展示全体について)

- ・ ありがとうございます(2名) ・ 是非またこのような機会をつくって頂きたい

(被災地への壁面構成に対して)

ただ貼るだけでなく、あいている所にメッセージや絵をかいたらよいと思う。

(3日目) 18日(月・祝) (全回答者38名の内23名)

(手作りおもちゃに対して)

- ・ (育児をしていない学生が) よく考えて作っており感心した(4名)
- ・ 頑張って作っていることが伝わるものばかりだった
- ・ 年齢別の成長に合った玩具が沢山あった ・ 色が綺麗で、かわいかった(2名)
- ・ 子どもが楽しんでいて、子どもを遊ばせてもらった(3名)
- ・ 偶然通りがかっただけだったが子どもの喜ぶ顔を(玩具を)作った方に見せたい位だった
- ・ もっと早く来て子ども(一歳児)を遊ばせたい ・ 手作りの大切さを改めて感じた
- ・ 子どもが赤ちゃんの時に作れたらよかったと思う

(学生に対して)

- ・ お姉さん達に話し掛けても子どもになかなか工作を教えてくれなかった。恥ずかしいのも分かるが来たのにおもしろくない。子どもと一緒に遊んで欲しかった。

- ・マイペースな息子にも笑顔で接して下さり、ありがとうございました
- ・若いお兄さん、お姉さんに遊んでもらえて子どもが喜んでいました
- ・今の気持ちを忘れず、素敵な保育者になってほしい ・妹と遊んでもらって助かった
- ・壁新聞をみて、(学生が) 子どもの成長に必要な母親の気持ちを学んでいると感じた。
これからもしっかり学んで欲しい。
- ・これからも頑張ってください(5名)

(その他の展示・ワークショップに対して)

- ・あかちゃん(親)向け情報はとても役に立つだろうか?
- ・(壁面構成が) テープや立体的な工夫があり参考になった
- ・壁面構成は、思わず子どもが触って楽しむようなかわいらしさがあって、良かった
- ・日頃、親が教えられる工作は数点しかないのでも子どもも大好きな工作を楽しめたと思う
- ・ペットボトルのキャップでの壁画や、食品トレーでの壁掛けなどアイデアたっぷりで、どの家庭にもある材料で出来る物を教えて頂いた
- ・案外、自宅ではさせてあげられないことを会場で教えて頂きながら経験させて頂き、子どもも喜んでいました
- ・特別支援学級に通う子どもがお世話になった。きちんと作成でき、達成感を味わって嬉しかった

(展示全体について)

- ・全部、子どもの喜ぶものばかりで楽しかった(3名)
- ・各コーナーで楽しく、子どもも喜び、2度伺った
- ・親子で楽しめるよい時間を過ごすことができた
- ・手作りの良さを感じた ・卒業生として来た ・ありがとうございました(5名)

(被災地への壁面構成について)

- ・被災地の方は毎日悲しい思いをなさっていると思う。自分も励ましたいので、とても良い企画だと思った。

(4日目) 19日(火) (全回答者8名の内3名)

(手作りおもちゃに対して)

- ・色が綺麗でかわかった ・娘が介護施設で壁面を作る係なので、参考になった

(学生に対して)

- ・卒業生で懐かしく作品をみた。保育士の就職は難しくなっているが、頑張りたい。
- ・子どもの幼稚園に実習で来てもらった

3 被災地施設との交流について

3・1 被災地施設への制作物送付

7月19日、会期終了後、学校に制作物を持ちかえって、教員・学生で整理・点検・梱包を行った。7月28日、会場で制作した壁面構成（3枚、「お花畑の動物達」「ペンギンの行進」「夏の子ども達」）を含めた制作物を下関市市民部防災安全課に御紹介頂いた宮古市内の保育所（小山田保育所）に発送することとなった。また、下関市市民部から、予め「1施設宛に送付することを連絡しているが、近隣の2保育施設で巡回・分配する予定である」という連絡を受けたため、3施設で分配出来るよう、下記1）～5）の整理・梱包を行った上で発送した。

1) 壁面構成〔計10枚：7枚（学生・生徒の作品）、3枚（来場者と共同制作）〕

- ①栄養健康学科学生制作（寄せ書き）、②保育学科学生制作（春の動物たち）
- ③～⑤下関短期大学付属高校生制作（夏の海と花火、夏の海と子ども、夏の無人島）
- ⑥保育学科学生制作（秋の芋ほり）、⑦保育学科学生制作（秋のお月見）
- ⑧～⑩「作品展と工作体験」来場者と共同制作品（写真7（右）参照）

2) 手作りの壁飾りと風車（写真9参照）

〔壁飾り・計38個（食品トレー等を利用したりサイクル工作）、風車70個〕



写真9 （左）食品トレーを利用した壁飾り、（中央）豆腐パック等を利用した壁飾り、（右）風車

3) 割り箸鉄砲と手作りの的^{まよ} (写真10参照)

[鉄砲30個、的45個、遊び方・作り方説明3組、学生からのメッセージ3通、輪ゴム3箱]

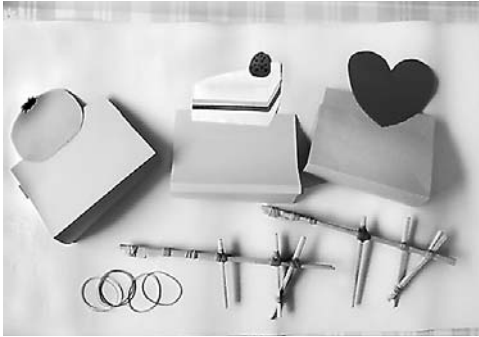


写真10 (左) 割り箸鉄砲と手作りの的



(右) 的の制作に励む保育学科学生

4) てづくり双六 (食育双六) (計9枚: 3種類×3組、本作品展展示作品)

5) 桜山同窓会よりメッセージ集 (A4ファイル1冊)

・桜山同窓会 (河野学園・下関短期大学付属高校の卒業生) より被災地職員・保護者宛

3・2 被災地施設からの連絡について

8月31日付で宮古市内、3ヶ所の保育所(「小山田保育所」「田老保育所」「津軽石保育所」)より御礼状の送付を頂いた(図1～5参照)。被災地に無事に作品が届き、御礼状を頂いたことによって、当初の目的は概ね達成できたと考えられる。

特に、我々が注目したのは、別紙御礼状における「頂いた割り箸鉄砲は大人気でした」「壁面構成は、季節感を子ども達に味わってもらえる贈り物でした」「(2施設は)被災し保育所がなくなり仮設での生活」「震災後5ヶ月が経過しますが、町並みは瓦礫が片付き殺風景になりました」という文面である。すなわち、室内における工作・遊びや環境構成が、巨視的にみれば被災地における保育環境の心のケアにも繋がるのではないかと考えられるためである。

「瓦礫」が通常の町並みに戻り、完全に復興するためには、しばし時間が必要であろう。「運動会&遠足など当たり前を経験してきた行事はできるだけ実施の方向で考えています」と記されているが、「乳幼児の育ち」においてより良い環境の提供とは何か、被災地以外の場は何が提供できるのか、本学でも考えるきっかけを頂いた。同時に、今回の交流を通じて、被災地に対しては長期的な支援が必要であることを実感することができた。

平成23年8月31日



学校法人河野学園 下関短期大学
学生一同様

猛暑と別れを告げ、虫の音色が妙に物哀しく感じる今日この頃です。

先日は、学生さんから数々の作品をありがとうございました。
早速、当保育所以外の2ヶ所の保育所へお渡しました。田老と津軽石は
被災し保育所が無くなり仮設での生活を余儀なくされています。

早速、頂いた割りばし鉄砲は大人気でした。友だちと競い合うクラス、
ゴムが飛ぶことを喜ぶクラス、やって頂戴と興味を示すクラス……。

様々な様子を見せていました。壁面構成は、季節感を子ども達に味わっ
てもらえる贈りものでした。

震災後5ヶ月が経過しますが、町並みは瓦礫が片付き殺風景になりました。
運動会&遠足など当たり前前に経験してきた行事はできるだけ実施の
方向で考えています。

子ども達の明るい未来のために職員27名心のケアをしながら頑張り
たいと思います。

本当に素敵なプレゼントありがとうございました。

河野先生・堀尾先生・稲員先生・高杉先生
本当にありがとうございました。

宮古市
小山田保育所・田老保育所・津軽石保育所 園児一同

図1 「ありがとう」(小山田保育所からの御礼状)



図2 「壁画も各部屋に貼らせていただきました」
(小山田保育所からの御礼状添付書類)



図3 「わりぼしでっぼうたのしかったよ!」
(小山田保育所からの御礼状添付書類)



図4 「たのしいおもちゃ ありがとう」(田老保育所からの御礼状)



図5 「ありがとうございます！」(津軽石保育所からの御礼状)

4 おわりに — 今回の反省と今後の活動について —

会期終了後7月26日、担当教員で開いた反省会の内容、及び8月31日宮古市内保育所（3施設）からの御礼状内容を踏まえて、反省点と今後の展望は以下の通りである。下記の内容を踏まえ、今後の作品展開催・学生教育・社会活動に活かしたい。

1) 第1・2回「作品展と工作体験」との比較

- ・会場がより広く、人通りが多いため来場者が多かったので、次回も同じ場所を希望したい。
- ・場所が広く、見やすいためか、大人の来場者が展示物をじっくりみて下さった。
- ・今回は附属幼稚園からの参加作品はなかったが、今後も呼びかけたい。
- ・初日、アンケート回収箱を出し忘れた。

2) 工作体験・ワークショップについて

- ・援助を行った保育学科学生の子どもへの対応は、個人差が大きかった。子ども達に積極的に声を掛け、保護者と共に援助ができるよう、指導を強化する必要がある。
- ・工作体験は、子ども向け作品が中心であったが、様々な年代の方々が来場されるので、年代を問わない作品制作、あるいは大人向けの体験コーナーがあっても良い。

3) 被災地送付壁面の制作について

- ・工作体験・ワークショップ・被災地送付壁面工作の連動を、より考えるべきであった。
- ・「切り紙」で花を作る工作は、子どもから高齢者まで短時間で手軽に行え、好評であった。
- ・急遽、計画を変更することになったが、17・18日、学生が援助しながら来場者に折り紙・切り紙を制作していただき共に壁面を完成させることによって、主催者側の意図（工作の楽しさを伝える、被災地支援を目指す）が直接伝わるように改善されたのではないか。

4) 被災地への作品送付・交流について

- ・8月31日付で御礼状を頂いたため、当初の目的は概ね達成できたと考えられると同時に、今回の交流を通じて、被災地に対しては長期的支援の必要性を実感できた。
- ・子ども達には「割り箸鉄砲」が好評であり、また季節を感じられる壁面構成が好評であったため、今後「動くおもちゃ」や壁面構成の送付を考えたい。

謝辞

作品展の開催にあたり、展示場所を無償で提供して下さいましたシーモール下関商業開発様、御後援頂きました下関市教育委員会、御支援頂きました下関市市民部防災安全課、広報して下さいました下関市（市報「かがやき」）、山口新聞、週刊リフレッシュ、サンデー下関の各位様に対し、記して深謝致します。

注（参考論文等）

- 1) 河野光子他：「楽しい手作り遊び」作品展開催報告，下関短期大学紀要，28号，2010年
- 2) 下関市ホームページ：東北地方太平洋沖で発生した地震の本市の被災地支援状況，
<http://www2.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1299828908447&SiteID=000000000000>
- 3) 下関市：下関ぶちうま食育プラン，2009年
- 4) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第2報，下関短期大学紀要，30号，2013年